



京都府大広報

2013.3

No. 171



- 特集 1 京都府立大学から発信する『京都学』 2
- 特集 2 『大学間連携共同教育推進事業』の取組 4

CONTENTS

トピックス

地域貢献 6 国際交流 6 受賞情報 8

各学部・研究科の取り組み

文学部 9 公共政策学部 9 生命環境科学研究科 10

話題の研究 11 / ニューフェイス 11 / 退職教員からのメッセージ 12 / イベント情報 12

<http://www.kpu.ac.jp>

特集1

■ 京都市立大学から発信する「京都学」 ■

国際京都学シンポジウム「ユーラシアからみた京都」

文学部歴史学科 櫛木 謙周 教授

このたび、京都市立大学と京都市立総合資料館の主催で、国際シンポジウム「ユーラシアからみた京都」が、2012年12月9日（日）午前10時から午後4時45分まで、キャンパスプラザ京都で行われ、140名余の参加がありました。本シンポジウムは、2014年を目途に「新総合資料館（仮称）」に設けが準備されている「国際京都学センター」の情報発信の最初の試みであり、次に記す府大 ACTR（地域貢献型特別研究）の成果報告も一部兼ねるものです。

本シンポジウムのねらいは2つあります。1つは、これまで京都との比較・交流研究の対象として別々に捉えられることが多かった東アジアとヨーロッパとを、ユーラシアという統一した視角から見直すことです。もう1つは、京都府の文化や産業を構成する重要な産品である茶を具体的な素材として、文化交流の歴史から現在の生産のあり方に至るまでをたどることです。

学長の開会挨拶のあと、午前の部の最初に、京都大学大学院教授の杉山正明氏による「京都とユーラシア東西の首都」と題する基調報告が行われました。杉山氏の講演では、コンスタンティノープル（イスタンブル）や大都（北京）などのユーラシアの主要な首都の概要や、ご自身がお住まいの京都御所付近のことなどが、種々のエピソードとともに興味深く語られ、ユーラシアの中でも京都は屈指の古い都として受け継がれてきたことが改めて強調されました。

次に、中国陝西師範大学副学長蕭正洪氏による「相対境界—古都の空間的特徴：かねて古都学の学術空間問題を論ず—」と題する報告の予定でしたが、ご都合で同大学文化学院院長の賈二強氏による同報告の代読となりました。その報告では、長安などの古都の歴史を考えるに

あたって、境界が時代によって変動すること、また農村との関係も含めて考察することの重要性などが指摘されました。また、古都の内部を構成する政治権力空間や公共空間、あるいは詩などに表れた想像空間など、京都学にとっても重要と思われる論点が提示されました。



午後の部に入って最初は、京都外国語大学教授のシルヴィオ・ヴィータ氏から、「日本のローマ—戦国時代の京都を憧憬するヨーロッパの宣教師たち—」の報告がありました。そこでは、16～17世紀の宣教師の目から見た京都が取り上げられ、彼らが本国に京都を説明するのに用いた「ヨーロッパにおけるローマのようなもの」という表現から、当時の京都の占める位置を考える興味深いものでした。宣教師たちが京都をめざした理由として、単に政治の中心であるだけでなく、学問や宗教の程度の高さが重要であったことなどが示されました。

次に行われた、本学教授の上田純一氏による「日中交流の中の「茶」」の報告では、最近西安郊外の法門寺から発見された9世紀頃の茶道具の紹介や、禅宗と茶の文化との関わり、外交使節に対して茶による接待が行われた意義などが述べられ、今日の茶の文化に至るまでの歴史がわかりやすく示されました。

最後に、宇治市宇治茶生産組合前組合長の山本晃一郎氏から、「わたしのこだわり 本す栽培の宇治茶」と題して、本す栽培などの技術的な特徴、あるいは宇治茶生産の抱える問題などについて、生産農家としての豊富な経験にもとづく報告が行われました。そこでは文化の基礎となる農業に高い誇りをもって取り組んでおられる姿勢が印象的でした。

討論では、上記の農業などの生業の視点の重要性、また、みやこの比較を深めてゆく必要性、あるいは、外からみたみやこのあり方の問題など、今後京都学をすすめてゆく上での貴重な論点が提起されました。



府大 ACTR (地域貢献型特別研究) 『学際的・国際的視点にたつ京都学構築のための方法的探究』

文学部歴史学科 櫛木 謙周 教授

本 ACTR は、新しく設置される「国際京都学センター」の共同研究のあり方を考えるための研究を行うことを目的としました。そのために、京都府立大学及び京都府立総合資料館の知的財産の豊富な蓄積を活かして学際的な交流を行うこと、また、大学・資料館の研究者だけではなく、自治体や関係機関、府民との協働を重視しました。後者については、府・市やその関係機関の方々にも報告・討論に参加していただき、また宇治茶生産農家の方に同じテーブルで議論していただくことができたことが大きな収穫でした。

さらに、今後の国際京都学センターに期待される役割として、国際的な学術交流、あるいは研究成果の発信があります。最近、西安の陝西師範大学に国際長安学研究院が設置され、まさに国際京都学センターに対比される組織が活動を始めていますが、そこは是非とも交流の機会をもちたいと考えました。そして実際に ACTR の研究会では、その研究内容や組織などについて、また前記の国際シンポジウムではその研究の一端を紹介していただきました。あわせて、中国の文化遺産の現状と問題点についても議論することによって、今後の国際交流にあたって両国の置かれた状況を認識する機会を得ることができました。



京都学の重要な使命として、研究会では、京都独自の問題を普遍化して世界に発信してゆくことが指摘されましたが、その視点として重要と思われる事柄を私なりにまとめておきたいと思います。

まず第 1 に、生活と生業の視点です。今回は「食」の分野で「茶」、「住」の分野で「町家」を取り上げ、生活文化や生業を中心とする総合的研究としての京都学の可能性を探りました。そこでは共通して、京都の風土に適した生業や生活のあり方、また日常生活の中に埋め込まれた文化という点が強調されました。茶については過



去から現代に至る生活文化のなかで、また世界の生活文化のなかでどのような意味を持ち、今後どのように受け継がれてゆく(べき)か、さまざまな視点から追究する価値があることが確認されました。京町家についても、風土に根ざし、生活・生業と一体となったものであることが明らかにされ、そのような観点から、生活様式の変化の中でどのように再生してゆくべきか、また具体的にまちづくりの中でどのように活かしてゆくべきかを考えることが、歴史的都市の継承・発展に関わる重要な課題であることが示されました。

第 2 に、上記の生活・生業をとりまく環境や景観の視点です。これらについては、自然と文化の両面から、丹後・天橋立などを例にアプローチを試みました。ここでは、人間の営みを含みこんで自然景観が変化する様相、またそれを各時代の人々がどのように認識したのか、絵図などをもとに考察する視点が提示されました。そこから、松林などの景観が、人々の生業の展開と密接な関係をもって形成されたこと、環境を固定的に捉えるのではなく、長期的・短期的なさまざまな変動のなかでその保全を考えるべきことが明らかにされたことが重要とされます。

最後に、第 1・第 2 の視点を深めてゆく場合にも言えることですが、京都をみる視点そのものに関する研究の重要性です。これについては、資料館所蔵資料をはじめとする国内外の京都に関する諸資料(テキスト・イメージ、その他)を読み解き、現代のグローバル時代の流れの中で京都を位置づける理論的方法も含めた検討の必要性が議論されました。

以上のほかにも漏れている重要な視点はあろうでしょうが、限られた紙面での紹介としてお許しいただければと思います。報告や討論に参加していただいた皆様方にこの場を借りまして、厚く御礼申し上げます。

特集2 ■『大学間連携共同教育推進事業』の取組 ■

文部科学省の平成24年度新規事業「大学間連携共同教育推進事業」に、本学が代表校となり、本学、京都府立医科大学及び京都工芸繊維大学から申請した「時代が求める新たな教養教育の京都三大学共同（モデル）推進事業」が採択されました。

また、本学が連携校となって申請をしていた「産学公連携によるグローバル人材の育成と地域資格制度の開発」（代表校：京都産業大学）、「地域資格制度による組織的な大学地域連携の構築と教育の現代化」（代表校：龍谷大学）についても採択されましたので、これらの事業の概要をご紹介します。

時代が求める新たな教養教育の京都三大学共同（モデル）推進事業

京都三大学教養教育研究・推進機構
運営委員長 築山 崇（京都府立大学副学長）

3大学による教養教育の共同化の取り組みについては、3大学の連携協議会教養教育部会「中間まとめ」（2005年9月）でその方向性が定められ、2014年度からの共同授業開始に向けて議論が進んでいますが、本年度、今回の文科省事業の募集があり、大学改革のひとつの焦点となっている「教育の質保証」も含めた本推進事業が採択されました。事業の骨格は以下のとおりですが、共同化のかたちとともに、今の時代・社会に求められる教養教育の内実をつくっていくことが重要です。

今日、地球環境の回復力、資源と生命圏の有限性の現実化や、一国一地域の変化が直ちに全世界の人々に影響を与えるグローバル化の進展などによって、社会全体の枠組みが大きく、かつ急激に変化しています。そうした状況の下で、大学教育においては、この枠組み自体を問い返し、「正解」のない問題に取り組み、オルタナティブを探求する学びが求められています。

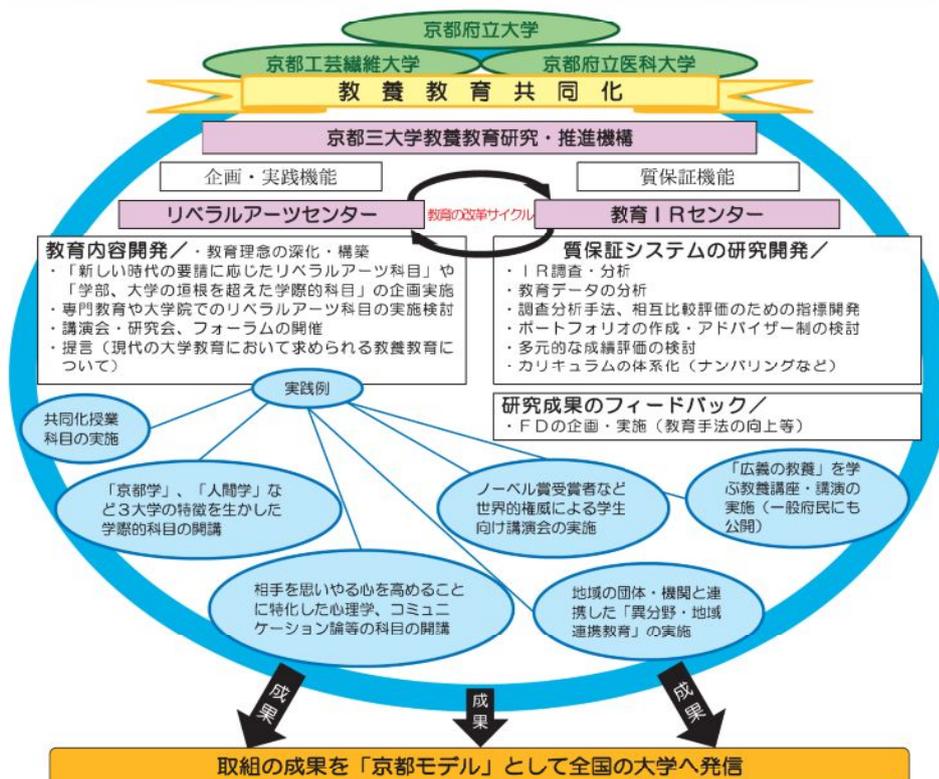
東日本大震災は多くの尊い命を奪い、住民の生活や地域の産業に深刻な影響を与えました。原子力発電所の事故は、暮らしとエネルギーの問題を先鋭な形で投げかけ、国民全体が幸福感や社会関係のあり方を深く問い直す状況が広がっています。

このような時代の転換点にいるという認識を踏まえ、

京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の国公立三大学は、本事業を活用して、医学系、理工学系単科大学を含む異なる個性の三大学の教養教育を共同化することによって、国公立三大学にまたがる「新しい時代の要請に応じた教養教育カリキュラム」の完成を目指していきます。

本事業の趣旨は、国公立三大学の教養教育カリキュラムを共同化し、質の高い、新しい時代の要請に応じた特色ある教養教育を実施することです。具体的には、「京都三大学教養教育研究・推進機構」を設置し、新しい時代の要請に応じた特色ある教養教育の開発に

京都三大学 教養教育共同化による「新しい時代の要請に応じた教養教育」の実践



あたるとともに、IRの推進を通じた教育成果の検証を行い、FD等につなげていくことにより、学修の質保証の仕組みを構築します。そして、大学の特徴・強みを生かした教養教育カリキュラムを提供することにより、科目の選択幅を拡大し、学生の多様な関心・教育養成に応え、総合的に物事を観察し的確に判断できる能力と豊かな人間性の涵養を図っていきます。

さらに、「現代の大学教育において求められる教養教育」についての提言を行うなど、社会への発信を行っています。

- ※ 1 IR (Institutional Research)
大学機関研究。様々な情報を収集して、データベース化。
評価指標として管理し、その分析結果を教育・研究、学生支援、経営等に活用する。
- ※ 2 FD (Faculty Development)
大学教員の教育能力、資質の向上のための組織的取り組み。

【3 大学教養教育共同化フォーラムを開催!!】

本機構では、平成 25 年 2 月 3 日、京都府との共催により、3 大学教養教育共同化フォーラムを開催しました。

『時代が求める新たな教養教育を考える』をテーマに、坂東眞理子氏（昭和女子大学学長）の基調講演、また、築山運営委員長がコーディネーターを務め、坂東眞理子氏、上杉孝實氏（京都大学名誉教授）に対談いただき、参加の皆さまと一緒に今後の大学の教養教育のあり方を考えました。



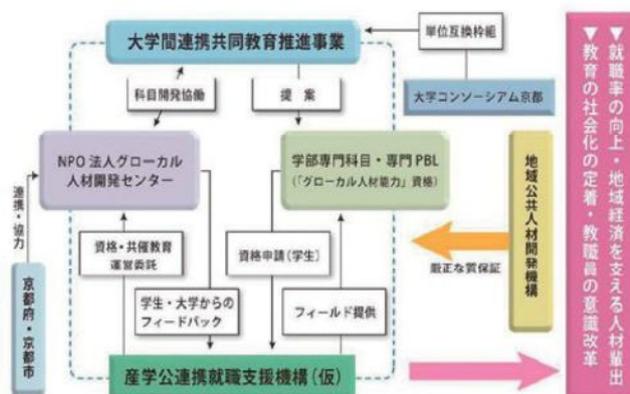
坂東眞理子氏(中央)と上杉孝實氏(右)の対談
左は築山運営委員長(コーディネーター)

産学公連携によるグローバル人材の育成と地域資格制度の開発

地域社会に根付きつつグローバル経済の荒波を読みきる能力をもった「グローバル」な人材の育成を目指し、京都経済同友会を中心とする京都経済 4 団体と大学が協力し、「産学公」の協働で体系的な教育プログラムを開発する取り組みです。

本学では、学生によるコミュニティ FM 放送をはじめとする PBL (Project Based Learning) の実践を中心に進めていくほか、先進事例へのヒアリング調査、経済界から講師を招聘しての FD 講演会の実施、学内に設置したプログラム検討委員会による検証等を行っています。

事業取り組みにおける各団体の関係性・教育サイクル・最終成果のイメージ図



(文部科学省 Web サイト) 平成 24 年度「大学間連携共同教育事業推進」の選定状況について
「平成 24 年度「大学間連携共同推進事業」の選定取組概要資料(地域連携)」より引用
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afidfile/2012/10/02/1326336_2.pdf

地域資格制度による組織的な大学地域連携の構築と教育の現代化

地域公共人材を育成することを目標として開発された修士レベルの地域資格制度(地域公共政策士)を学部レベルも含めたものに拡充し、アクティブラーニングを柱

とした地域連携教育プログラムを開発するとともに、大学が地域社会の課題に対してパートナーの一員となって取り組む仕組みを構築することを目指しています。



(文部科学省 Web サイト) 平成 24 年度「大学間連携共同教育事業推進」の選定状況について
「平成 24 年度「大学間連携共同推進事業」の選定取組概要資料(地域連携)」より引用
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afidfile/2012/10/02/1326336_3.pdf

本学では、主に京都府北部地域での展開を図り、地域に入って様々な気付きや学びを得ると共に、課題に対する何らかの政策提言にまで結び付けていく取り組みを行っています。

トピックス

■ 地域連携 ■

精華町と連携協力に係る包括協定を締結

精華町との連携・協力の取組を今後一層推進するため、平成25年1月31日に連携協力に係る包括協定を締結しました。

精華町は、けいはんな学研都市の中心地にふさわしいまちとして、都市と自然の調和を図りながら学研都市を活用した創造的なまちづくりを展開しています。



包括協定調印式で握手する
木村精華町長（左）と渡辺府立大学学長

一方、京都府立大学は附属精華農場や次世代工コタイプ植物工場をはじめ産学公連携研究拠点施設がある精華キャンパスを設置し、学研都市の一翼を担う研究拠点の一つとなっています。

この連携協力包括協定を結ぶことにより、幅広い分野で精華町の課題に対応するとともに、学研都市の更なる発展に貢献していきたいと考えています。

包括協定では、今後、次の事項について連携協力をさらに進めていくこととしています。

- (1) 府立大学精華キャンパスに係る教育研究を通じた地域の振興に関する事項
- (2) 健康・福祉の増進に関する事項
- (3) 環境保全に関する事項
- (4) 文化・教育の振興に関する事項
- (5) 産業の振興、まちづくりの推進に関する事項
- (6) 人材の育成に関する事項 等

■ 国際交流 ■

西安外国語大学との交流

本学では、中国・カナダなどの9大学と教育研究に係る国際交流の協定を締結しています。（平成25年3月1日現在）

その中で、西安外国語大学（中国）との協定に基づく交流では、教員の相互受入、日本語講師として本学大学院生を派遣するなどの交流を行っています。

今年度、本学に来られた西安外国語大学の教員、本学から派遣した大学院生のメッセージを紹介します。

西安交換教員からのメッセージ

文学部日本・中国文学科 李 忠啓
(西安外国語大学交換教員)

桜満開の四月上旬に日本の京都に来ました。

今回の来日は、数えたら十三年ぶりです。京都の清潔で落ち着いた町並み、豊かな緑、清らかな川の流れ、青い空などは、十三年前とちっとも変わりません。懐かしく思うばかりなのです。



しかし、わたしの住む古都長安は、古都とはほとんど感じられないほど、けばけばしく、みごとに近代化されてしまいました。十三年前、ソフトの面でも、ハードの面でも、中国は日本に学ばなければならないところがたくさんあると思っていました。十三年後の今も、なお、そう感じているのです。

西安外国語大学と京都府立大学との友好交流事業

は、三十周年を迎えたところです。三十年来、双方の絶え間ない努力で、幅広く、実りのある多彩な交流を行ってきました。その交流は、教員の交流を中心としてはじまり、現在、もうすでに留学生の派遣にまで、その輪を広げています。これから、その交流の輪がもっと大きくなることを心から期待してやまないのです。われわれのこういう交流は、世の中を動かすような力とはならないでしょうけれども、中日友好のための一助になるに違いないと思います。

三十年来、両大学の友好交流のために、ご尽力いただきました京都府の方々、京都府立大学の方々に深く感謝の意を表したいと思います。

府立大学に在職する一年間、主な仕事は中国語を教えることでした。日本人の学生諸君に向かって講義をするのは、楽しくて幸せなことですが、日本人の言語発想法に基づいて、学生諸君に完全に納得させるまで、中国語の関連知識についての説明をするには、わたしはやはり力不足です。ただ、案外に学生諸君が、中国語の勉強に熱心で、まじめで、いつも明るい顔で、わたしの授業に出てくれることは、何よりも心の慰めとなります。そこからはまた未来への希望が感じられます。

一年来、公私とも、周到なる御配慮と御世話をして下さいました府立大学の先生方、職員の皆様に衷心より感謝し、あつくお礼を申し上げます。

今後、この一年間の貴重な体験を充分にいかして、両大学の更なる交流のために力を尽くしていきたいと思っています。

西安より（派遣院生からのメッセージ）

西安外国語大学派遣院生 白崎 藍
 （文学研究科国文学中国文学専攻）

西安に来てから早いもので、もう半年になります。初めは見るもの聞くものが全て珍しく鮮烈であり、かえって疲れてしまうこともありましたが、今は自分なりに生活をしています。

京都府立大学と西安外国語大学の交流事業により、

ここで一年間会話の授業を受け持つというのが私に与えられた役目ですが、不思議とそれが辛いと感じることはほぼなかったように思います。何か困っても、西安外大の先生方や日本から来た先生方に気楽に相談できることが大きいのでしょうか。

この学生さんたちはまっすぐで、澄んだ目をしています。彼らの学びが少しでも喜ばしいものであるよう、試行錯誤の毎日です。それが微かでも、友好の役に立てばと願ってやみません。

レーゲンスブルク大学トーマス・シュタール博士来学！

一昨年より夏ごとに20名前後の学生が、レーゲンスブルク大学にサマーコースでお世話になっています。その縁でドイツ語外国人教育センター部長トーマス・シュタール博士が、11月に京都府立大学においてになりました。シュタール博士は、11月21日（水）から1週間、教養教育のドイツ語（欧米言語クラス）や欧米言語の専門科目の授業を青地とともに担当されました。先生は1回生にEU圏でのドイツ語の重要性をわかりやすいドイツ語で講義されたり、2回生あるいは3・4回生のドイツ語プレゼンテーションに母語話者ならではの視点からコメントをされたり、大いに活躍してくださいました。



また、22日（木）5コース後、一般来聴者も交えて、「英語のあとのドイツ語、ドイツ語での第三言語（第二外国語）授業」という演題で、英語とド

イツ語の類縁性から学習効果を高める取り組みをお話くださり、30名ほどの学生たちは、熱心に聞き入っておりました。その後のパーティーも大盛況で、夜遅くまで日本語もできるトーマス先生の周りでは、ドイツ語、英語、日本語が飛び交っておりました。これはトーマス先生にとっても楽しいひとときだったようです。

また、授業のない時間を利用して、金閣寺、龍安寺、青蓮院、三年坂などを学生とともにめぐりました。日本通のトーマス先生との少し緊張するドイツ語体験は、学生諸君の人生の宝となると思います。

（文学部欧米言語文化学科教授 青地伯水）



青少年交流キズナ強化プロジェクト（インド、スリランカの学生との交流）

平成24年11月9日アジア太平洋州地域及び北米地域との青年交流キズナ強化プロジェクトのプログラムの一つとしてインド、スリランカの大学生32名が、本学の学生と交流しました。本学からは、欧米言語文化学科の学生を中心に、歴史学科、森林科学科の学生や文学部大学院生、中国人留学生など合計45名が参加しました。



本学教員の歓迎のあいさつの後、インドの学生、スリランカの学生が1人ずつ本学訪問への抱負を述べ、本学からは、欧米言語文化学科の学生2名が京都府立大学、京都、特に祇園ついて、英語で紹介しました。

今回の交流会の全ての発表、ディスカッションは英語で行われ、「若者文化今昔—イメージと現実のギャップを語ろう」というテーマのもと、「教育」「大学」「仕事」「結婚」「娯楽」「アジアの若者」の6つのグループにわかれてディスカッションを行い、グループ代表による発表が行われました。

閉会后、学生たちはそれぞれ歓談し、写真撮影を行い、話を弾ませながら交流を深めました。



*キズナ強化プロジェクトとは、被災地復興を目的とする外務省主催の事業の一つであり、震災復興を支える実際の日本をよく知ってもらうことを目的としています。

受賞情報

文学研究科 井口千雪さん 「蘆北賞奨励賞」を受賞

文学研究科国文学中国文学専攻博士後期課程1回生の井口千雪さんが、『和漢語文研究』第九号に掲載した論文「『三国志演義』の原初段階における成立と展開一段階的成立の可能性―」により、第22回の蘆北賞奨励賞を受賞しました。昨年度も、現在博士後期課程一回生に在籍中の院生が同賞を受賞しており、本学では2年連続の受賞となります。

同賞は、立命館大学で長年教授をつとめられた故橋本循氏を記念して設立された橋本循記念会が、関西周辺で発表された中国文学に関する優秀な研究論文（本賞・奨励賞各1）と学術誌に対して授与しているもので、平成21年度には本学文学部日本・中国文学科を母体とする国中文学会が発行している雑誌『和漢語文研究』が学術誌部門で受賞しています。

公共政策学研究科 茂箆秀敏さん 「京都府知事賞」を受賞

公共政策学研究科博士前期課程2回生の茂箆秀敏さんが、公益財団法人大学コンソーシアム京都が主催する「政策系大学・大学院交流大会」において、研究奨励賞の「京都府知事賞」を受賞しました。

同大会は、京都の政策系大学・大学院の学生が一堂に会し、日頃の研究成果を発表・発信することにより、研究を深化させるとともに、広範な研究交流を図ることを目的として開催されるもので、発表内容は運営委員により総合的に審査され、優秀と認められた発表者には研究奨励賞が授与されます。

茂箆さんは、「木質バイオマスを活用したエネルギー創出による地域活性化策」の発表が、審査の結果、最優秀と認められ、研究奨励賞の「京都府知事賞」を受賞しました。

茂箆さんの受賞研究に係る現地調査風景



オーストリアで住民が出資して運営しているバイオマスプラントをバックに撮影（写真中央はギッシング市長、右は公共政策学部 青山教授）

生命環境科学研究科 高野和文 教授の共同研究グループ 「日本結晶成長学会論文賞」を受賞

生命環境科学研究科応用生命科学専攻の高野和文教授を含む共同研究グループによる論文「蛋白質の固相ゲル結晶育成技術の開発とその機能解析」が、結晶成長学の発展に貢献した優れた論文として、「第29回日本結晶成長学会論文賞」を受賞されました。

生命環境科学研究科 細矢憲 教授 「クロマトグラフィー科学会学会賞」を受賞

生命環境科学研究科応用生命科学専攻の細矢憲教授が、研究業績「機能性高分子多孔体の開発とクロマトグラフィー分析の簡便化」により、平成24年度（2012年度）クロマトグラフィー科学会学会賞を受賞されました。

生命環境科学研究科 津下誠治 准教授 「科研費」審査委員表彰を受賞

生命環境科学研究科応用生命科学専攻の津下誠治准教授が、独立行政法人日本学術振興会の平成24年度「科研費」審査委員の表彰を受賞されました。

本賞は、「科研費」の適正・公平な審査にあたって、模範となる審査意見を付した審査委員が選考され、表彰されるものです。

生命環境科学研究科 倉持幸司 准教授 有機合成化学協会研究企画賞を受賞

生命環境科学研究科応用生命科学専攻の倉持幸司准教授が、研究テーマ「固相合成から生命科学研究への新たな応用展開」により、2012年度（第25回）有機合成化学協会研究企画賞を受賞されました。

本賞は、有機合成化学分野における優れた萌芽的研究（研究企画）に対して授与されるもので、倉持准教授の固相合成用樹脂を合成の反応場に利用すると同時に、タンパク質のアフィニティ担体としても利用する研究企画は、将来的に医薬低分子の作用・副作用のメカニズム解析に応用されることが期待されるとして、受賞されました。



■ 各学部・研究科の取り組み ■

文学部

洛北史学会第14回定例会の開催

歴史学科 中 純夫 教授

平成24年12月1日(土)13時から本学大学会館多目的ホールにおいて、洛北史学会第14回定例会が開催されました。

洛北史学会は京都府立大学文学部歴史学科専任教員と文学研究科史学専攻に在籍する大学院生を中核として組織された学会であり、年1回の学会誌『洛北史学』(既刊1~14号)の発行と、年2回の大会開催を主たる事業としています。うち『洛北史学』は教員と院生から成る編集委員会によって編集刊行され、大会は主として院生によって企画運営されています。6月の大会は共通テーマを設定してのシンポジウム形式をとり(今年度のテーマは「歴史叙述と地域」、12月の定例会は自由に個別研究を発表する形式をとっています。

当日は以下の三発表が行われました。①中田恵理子氏(京都大学大学院博士後期課程)「中世末期のドイツ・ハンザにおける法と外交」②佐々木拓哉氏(京都府立大学

大学院博士後期課程)「戦時代の農村隣保事業に関する一考察」③藤本仁文氏(京都府立大学文学部講師)「近世中期京都の惣町運動」。

それぞれの発表の後には討論の時間が設けられ、フロアを交えて活発な質疑応答が行われました。(掲載写真は発表中の藤本仁文氏)

なお、本学文学部歴史学科・史学専攻のHPには洛北史学会のリンクがあり、大会開催案内や『洛北史学』バックナンバーの内容なども紹介しておりますので、あわせてご覧頂ければ幸いです。



公共政策学部

山田知事と増田客員教授による対談 ～地方自治の未来～

公共政策学科 藤沢 実 准教授

平成24年10月27日、公共政策学部の主催で、山田啓二京都府知事と増田寛也客員教授による府民公開講座が開催されました。この講座は、増田客員教授が担当されている授業「地方自治論」の一部を広く公開する取組で、今回で3回目となります。

はじめに、山田知事から「京都から考える日本再生のデザイン」という演題での講演がありました。講演では、社会構造の変化への対応としての消費税増税問題、領土問題に表象されるグローバリズムの中でのナショナリズムの高揚の問題、原発事故や豪雨災害に表象される想定の変化、これらの課題にどのように対応してきているのかについて説明されました。なかでも、政府に代わって全国知事会として日本のグランドデザインを策定し、提案されたことや、京都のiPS細胞、神戸の再生医療、大阪の創業といった地域資源を多極交流圏として活かしていくための関西イノベーション特区といった取組が印象的でした。

続く対談では、地方自治の中で、国との関係である団体自治に加えて、住民自治・住民参画について、京都府の具体的な取組が話題となり、山田知事からは、地域力

再生交付金や府民公募型公共事業といった新たな形での取組について、例えば、地域見守り活動によって犯罪件数が半減するといったように、成果を上げているとの報告がありました。



本学の学生をはじめ161名の参加者の皆さんが熱心に耳を傾けておられる様子や講座修了後、帰路に着かれる際の満足げな表情を見させていただき、京都府からの派遣教員として携わった諸準備の苦勞が報われたような気がしました。参加・協力してくださった皆様、ありがとうございました。

生命環境科学研究科

自然が選ぶ環境デザイン & 資源が選ぶエネルギーデザイン

環境科学専攻 建築環境・設備学研究室 尾崎 明仁 教授

当研究室は、建築を専門としています。建築というと意匠デザインを想像される方が多いようですが、建築の領域はとても広範で、その他にも構造・材料・施工・環境・設備・計画・歴史・法規などの分野があります。私は中でも建築環境・設備学を主なフィールドにしています。この分野は物理現象に即して、さらに熱・光・空気(物質)・音・水・人間などに細分類されます。私は、特に熱力学と熱・物質移動論を基にした建築機能デザイン(エコロジー建築や省エネルギー建築など)および Computer Science を得意としています。簡単に言えば、快適性・耐久性・省エネ性などに優れた建物を、伝熱理論を駆使して科学的に設計・開発・評価するということです。国際的には建築物理 (Building Physics) として体系化されとてもメジャーなのですが(わが国では建築環境学に含まれる)、国内では馴染みのない方が多いようです。建築機能デザインと説明すると、頭の上に「???」が浮かんでいるように見えます。

建築は人為的な構築環境の産物です。この人工環境は、人体系と建物系と設備系から成ります。人体系の生理・心理的要求に応じて、建物系の熱・光・空気・音などの環境要素をパッシブにデザインし、さらに設備系によってアクティブにコントロールすることが、いわゆる建築

機能デザインです。つまり、建築環境・設備学とは、人間生活や住まいの目的用途に対応して、建築内外の環境要素と設備機器を一体化し、最小限の機械制御により生活の利便性を向上させる空間システム学と言えます。



ダイレクトゲインによる太陽熱利用
(パッシブデザインの一例)

ところで、現在の都市建築は、大量の資源とエネルギーを投入したこれまでのスクラップ・アンド・ビルドを改め、サステナブル(持続可能)を目指しています。今後は、パッシブデザインとアクティブコントロールの統合が持続可能な都市建築の核心的コンテンツとなり、「自然が選ぶ環境デザイン」や「資源が選ぶエネルギーデザイン」が建築要件になると確信しています。

木造建築の伝統を活かす

環境科学専攻 木質構造・材料生産研究室 田淵 敦士 准教授

当研究室では、木造建築の耐震性能向上のための技術開発を研究テーマにしています。新築建物の耐震性能をいかに向上させるかということは当然ながら、既存の建物の耐震性能をどのように確保するかということが重要で、主に後者に重心を置いています。

地震災害の多い日本で、安全な生活を送るためには、一つには住宅の耐震性能を向上させることが必要です。現在、新築住宅の約半分が木造で、戸建住宅に限ると、9割弱が木造で建てられています。既存の住宅を含めたストックで見ると、やや木造の割合が増えます。一方で、住宅の耐震性能が現在の基準を満たしているかどうかということで見ると、約2割が耐震性が不十分と推計されています。この中には、1) 新築時には十分な性能であったが、その後の基準の新設や引き上げにともない性能が不足していると評価されるもの、2) 現在の技術ではまだ詳細な性能評価ができないもの、3) 住宅に対する価値観が現在とは異なるものなどがあります。また、京都府に目を向けると、京町家と呼ばれる古い木造住宅をはじめ、府内各地に伝統的な木造家屋があり、これらの中には建築基準法ができる前に建てられたものも多くあります。これらの耐震性能を向上させることは、安全

な生活を送るという観点からだけでなく、文化財保護の観点からも重要だと考えています。

写真は伝統的な技法を用いて建てられた、木造住宅の調査をしているところです。古い建物は図面が不十分のため、現地で実際に測量をして詳細を調べます。その上で、力学的なモデルを作り、地震時にどのような挙動をするかを計算します。伝統的な建物は部材を嵌め合わせて接合することが多く、評価の難しい点の一つです。そうした接合技術の力学的評価は大きな課題の一つで、評価が不十分な場合には実験を通じて特性を調べなければなりません。このプロセスの積み重ねによって、少しでも多くの木造建築を安全に利用できる手法について、研究・開発をしています。



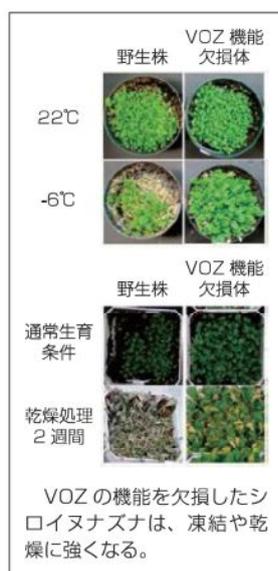
伝統木造住宅の構造調査

■ 話題の研究 ■

生命環境科学研究科 佐藤雅彦准教授らのグループが植物の環境応答の切换スイッチを発見

生命環境科学研究科の佐藤雅彦准教授らのグループが、環境から受ける様々なストレスに適応するための切换スイッチとして働く VOZ 転写因子の機能をモデル植物シロイヌナズナを用いて明らかにしました。

VOZ タンパク質の存在量を人為的にコントロールすることで、干ばつや冷害、病原菌、害虫に耐性を持つ植物を作出することが可能になると期待されています。



生命環境科学研究科 武田征士助教が代表を務める研究グループが花びらをまっすぐ伸ばすための遺伝子を発見

生命環境科学研究科の武田征士助教が代表を務める研究グループが、モデル植物のシロイヌナズナを用いて、花びら（花弁）をまっすぐ伸ばすために必要な遺伝子を発見しました。

今後、アサガオの台咲き品種などの花びらの曲がる原因解明に繋がる可能性もあり、また、発見した遺伝子の機能を改変することで、様々な園芸植物で、色々な形の花びらをもつ品種を作り出せるかもしれません。

生命環境科学研究科 中尾史郎准教授が代表を務める研究グループが冠島の生物相調査(2012年)の結果を発表

生命環境科学研究科の中尾史郎准教授が代表を務める研究グループが、京都府北部の文化財「冠島」の生物相を調査し、その成果を発表しました。

冠島では初めてとなる「アカマダラハナムグリ」(コガネムシ類の一種)の発見の他、1951年に世界で初めて冠島で発見されたゲンゴロウの一種「カムリセスジゲンゴロウ」を60年ぶりに確認しました。



冠島で採集されたアカマダラハナムグリ

また、1955年当時に採集されていたゲンゴロウやミズカマキリ、アメンボなどの大型の水生昆虫は現存しない事実も把握しました。

無人島の環境変化に関する貴重な情報となります。

■ ニューフェース ■

平成 24 年 10 月着任の教員の紹介

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 准教授 **岡 真優子** (おか まゆこ)

<主な研究領域> 感染防御学、低酸素ストレス

ヒトに寄生する菌は、免疫細胞からの攻撃を逃れて持続感染することができます。このような菌の持つ巧妙な技に興味を持っています。中でも結核の原因菌となるヒト型結核菌は、宿主の免疫細胞内で休眠（無症候状態）し、宿主の免疫力低下に伴って増殖（結核の発症）します。現在は、休眠菌に感染したヒトを正確に診断できないことから、その新しい診断法の開発に取り組んでいます。さらに、結核菌は、休眠している間に宿主にダメージを与えず何を栄養としてどうやってそれを獲得しているかを明らかにしたいと思っています。

平成 24 年 11 月着任の教員の紹介

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 教授 **亀井 康富** (かめい やすとみ)

<主な研究領域> 分子栄養学、肥満・生活習慣病、遺伝子発現調節、骨格筋機能

食物は、生命活動のエネルギー源であるとともに、私たちの身体をつくる材料となります。生命の維持のため私たちは外界から栄養素を摂取し、さまざまな形に変換し、生体反応を調節しながら恒常性を維持しています。生活習慣病は、食物摂取や運動習慣などの環境因子が人体に及ぼす積み重ねによって生じ、大きな社会問題となっています。私は、この生活習慣病を実験動物を用いてモデル化し、分子レベル・個体レベルの両面から研究を推進したいと考えています。



■ 退職教員からのメッセージ ■

Farewell to KPU

文学部欧米言語文化学科 菅山 謙正

学生時代も含めると約30年を過ごした神戸市外国語大学から京都府立大学文学部へ移って来てから7年の歳月が経った。残念ながら、この3月で私は京都府大を辞することになった。7年間の京都府大在任中、私の指導を受けた学部生、院生は現代英語の有り様が少しは分かり、なぜ英語はそうなっているかを他の人に説明できるようになったと信じる。それが、私の英語学研究の教育効果・社会貢献であると考えたい。平日夜遅くまで、休日や長期休暇も間断なく、研究室などで読書会や研究会を催し、その成果は、2011年秋に Kyoto Working Papers in English and General Linguistics 1 (Kaitakusha) として刊行した。No. 2も近刊の予定である。

私は昨年11月に還暦を迎えたが、知的好奇心は衰えることなく、今年も7月には Genève である 19th International Congress of Linguists で発表する。また、派遣により、9月中旬からは、Hungary 科学アカデミー言語学研究所に1か月滞在し、研究、講演を行うことになっている。4月からは私学で英語学を講じる。まだしばらくの間、英語学・言語学の学徒としては現役でいたい。

在職中は、学科の先生方、事務局の職員の方々に大変お世話になった。この場を借りてお礼を申し上げたい。
audaces fortuna iuvat

17年間の感謝

文学部歴史学科 上島 享

思いがけず、井口さんから府大に来ないかとの電話をいただいてから、はや17年。日本の学界を背負って立つ上司たちの背中を見ながら、大学院生の頃のように自由奔放に勉強をさせていただいた。教育も自分のスタイルを通し、大学を問わず国内外から優秀な若者が大学院のゼミに集った。血を吐く思いで論文を書きながらも、充実した楽しい日々だった。「日本史の学界はとてもフェアだ。短期ではおかし



いことがあっても、10年単位で見ると、しかるべき仕事は相応の評価を得ている」と大学院生にいつてきた。中期より長めの10年単位で評価する視座が必要だろう。それには、自由な発想を許す余裕と寛容さがなければならない。私が赴任した当時の府大はそのような雰囲気満ちていたし、それは今も生きていると思う。

30代の専任教員を、どんな40代の学者に育てることができるのか。それこそが、その大学が持つ潜在力だと思う。府大に感謝しつつ、少し離れたところから、これからの府大を見守っていききたい。

イベント情報

桜楓講座 (春の部)

最近のトピックを交えながら、本学教員がそれぞれの専門分野について分かりやすく解説します。

- Aコース** 5月25日(土) 10:00~12:00 講師: 生命環境科学研究科教授 吉富 康成
「インターネットと日本の魂」
- Bコース** 6月8日(土) 10:00~12:00 講師: 公共政策学部教授 小澤 修司
「社会発展と家族の進化」

京都府大広報 No.171 京都府立大学広報委員会 2013.3.25 発行

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5 TEL. 075-703-5904 FAX. 075-703-5149
Email kikaku@kpu.ac.jp